

## 巻頭言

### 政権交代と農業・農学

三輪 睿太郎

日本農学アカデミー副会長・農林水産技術会議会長・東京農業大学教授

「憲政党が、伊藤さんに代つて、内閣を組織した当時、頻りに反対して騒ぎまはつた連中も、己れは知つて居るよ。だが随分見透しの付かない議論だと思つて、己れなどは、独りで笑つて居たのさ。御一新の際に、薩摩や、長州や、土州が政権を執れたとて、なに彼等の腕前で、逆も遣り切れるものかと、榎本や、大鳥などは、向きになつて怒つたり、冷やかしたりした連中だ。

所がどうだ、暫くすると、自分から始めて薩長の伴食になつたではないか。何も大勢さ。併し今度の内閣も、最早そろそろ評判が悪くなつて来たが、あれでは、内輪もめがして到底永くは続くまいよ。全体、肝腎の御大将たる大隈と板垣との性質が丸で違つて居る。板垣はあんな御人よし、大隈は、あゝ云ふ抜目のない人だもの、とても始終仲よくして居られるものか、早晚必ず喧嘩するに極つて居るよ。大隈でも板垣でも、民間に居た頃には、人の遣つて居るのを冷評して、自分が出たらうまくやつてのけるなどゝと思つて居たであらうが、さあ引き渡されて見ると、存外さうは問屋が卸さないよ。

所謂岡目八目で、他人の打つ手は批評が出来るが、さて自分で打つて見ると、なか／＼傍で見て居た様には行かないものさ。」（勝海舟：大勢順応、「日本の名随筆 別巻 95 明治作品社（1999）」を底本にふろっぎいが入力、浅原庸子が校正し、2006年に青空文庫に所収されたもの）

いきなり引用で恐縮だが、この文の人名やいくつかの名詞を置き換えてみると、今秋、政権交代を体験した我が国の現状にピッタリではないか。

我々も当面、色々な面で政治のもたつきに覚束ない思いをさせられるだろう。先般の事業仕分けにおいて、科学技術や文化、教育など国家の計として重要性は自明とされていた分野が他の事業ともども、天下り団体糾弾、事業効果など

で裁断され、識者の憤激を買ったのもその一例である。業務仕分けはいずれも無駄な経費の削減を大テーマにしたもので、その目でみれば一定の合理性がないとはいえない。むしろ、問題は政権交代を機にやるべき重要な政治課題に計がなく、このテーマだけ突出させているところにあるのではないだろうか。

農業政策は長期間にわたり政治の継続性が重視され、微調整が続けられた結果、抜本的な方向転換ができず、気付いてみれば行き止まりにぶつかっている。

コメの生産調整は一時的な需給調整だったものが、構造的な消費低下にともなってその規模が拡大し、今や水田の4割が他の作物への転換を余儀なくされている。その間に、価格は下がり、生産調整には価格維持の役割が期待されるようになった。しかし、コメの減反は限界に達し、価格維持の期待にも応えられなくなっている。その間に農家経営の安定を目的とした所得補償的な政策も導入されたが、転作との抱き合わせであったように微調整にとどまってきた。

WTO交渉ではコメを重要品目として例外扱いとし、上限関税から逃れることに努力を集中してきた。この「重要品目」というのが曲者で自由貿易の拡大を使命とするWTOでは、ふとどき者として処罰を覚悟せよ、という扱いを受ける、実質は「ふとどき品目」である。そのため、ウルグアイラウンドではミニマムアクセスのバツを課せられ、国内では泣いて減反をしながらコメを輸入させられるという不本意なことになった。

いずれも国民の世論、国会決議、農業団体の「コメを守れ、農業をに守れ」という大合唱を背に過去の政策との整合を図りつつ、さらには財政事情、国際規律などハードな障害もかわして、政府が各時点で最善の策、あるいは次善の策を求めた結果である。

国民の負託を得て政権が交代したということは、過去の政策との整合にこだわることなく抜本的な変更をする期待を負ったということだ。

ところが、新政権も生産調整は継続、WTOではコメの重要品目化と従来と同じことをやろうとしているようだ。個別所得補償の導入を重点施策としているが、この政策はコメの消費拡大、価格低下を国際競争における優位性とする努力とそれを担う農業経営の体質強化が伴って成果をあげる。単独では生活保護と変わらないものになり、決して農業の発展をもたらすものではない。

このように、現在のところ新政権はせっかくの機会をぼんやりと見過ごしているように見える。ダム廃止や無駄削減は一部国民の溜飲をさげるであろうが、それに終始しては国の発展はない。前政権の末期にみられたように国民の人気に擦り寄る姿勢が強いのも気になる。政治は国民・大衆からみれば、数段高い視野と見識で国を操縦するもので、極限すれば国民目線で行うものではない。操縦士が乗客目線でジャンボ機を操縦したら乗客は不安と恐怖に投げ込まれるであろう。

農学分野も新政権が期待に応えるように積極的に発言してゆきたいものだ。本アカデミーはそうした機能をもつ唯一の集団だと思っている。

會田先生に、政権交代を題材にスケールの大きな巻頭言を（誰かが）書いてくれないだろうか、と期待を述べたところ、自分が書く羽目になったのはほとんど手違いであった。